

「ぎんのすず」広島図書関係略年表

年・月	「ぎんのすず」・広島図書	時代背景
1908(明治41) 2 1914(大正 3) 11 1918(大正 7) 7 1922(大正11) 10 1923(大正12) 1 1943(昭和18) 9	広島印刷株式会社(以下、広島印刷)設立	「少女の友」創刊(～1955年) 「少年倶楽部」創刊(～1962年) 「赤い鳥」創刊(～1936年) 「小学五～六年生」創刊(後に一～六年生) 「少女倶楽部」創刊(～1962年)
1945(昭和20) 8 9		6日 広島に原子爆弾投下。15日 終戦 戦時色の強い教科書の「墨塗り」実施。 GHQ/SCAPによる新聞・雑誌の検閲開始
1946(昭和21) 4 6 7 8 10 11	6日 広島児童文化振興会「ぎんのすず」(タブロイド判)を創刊、GHQ/SCAPの検閲で一部削除 雑誌形態の「ぎんのすず」発行(広島児童文化振興会／編輯、広島印刷／印刷、学校直販で販売。第1回「銀の鈴子供祭」開催)	「赤とんぼ」創刊(～1948年) 広島児童文化振興会設立 「3～6年の学習」創刊(後に1～6年) 「銀河」創刊(～1949年) 日本国憲法公布。「少年」創刊(～1968年)
1947(昭和22) 3 4 5 9 11 12	中学生向け「科学新聞」創刊 広島印刷出版部をもとに広島図書株式会社(以下、「広島図書」)設立 「ぎんのすず」総計20万部突破。中学生向け「銀鈴」創刊 「科学新聞」を改題し中学生向け科学雑誌「新科学」創刊 漫画「どんぐり太郎」(平井房人著)刊行	教育基本法、学校教育法公布 国民学校初等科を小学校に改称 日本国憲法施行
1948(昭和23) 1 4 5 10 12	「銀の鈴文庫」、幼児向け「ブレイマート」、「銀鈴」を改め 女学生向け「青空」創刊。副読本「理科の友」刊行 「ぎんのすず」総計50万部突破 「こどものうた」、小学1・2年生向け「えどくほん」、3・4年生向け「学級文庫」創刊	「漫画少年」創刊(～1955年) 広島児童文化会館開館
1949(昭和24) 1 2 4 5 6 7 8 9 11 12	中学生向け「新社会」創刊。GHQ/SCAP民間情報教育局課長著「民主主義教育の理論と実践」刊行 漫画「カンちゃんの虫のくに冒険」(沢井一三郎著)刊行 「ぎんのすず」総計100万部突破。「新科学」「新社会」を合併し中学生向け「理科と社会科」創刊 広島印刷と広島図書が合併し、広島図書となる 「ぎんのすず」総計120万部突破。諸雑誌とあわせ200万部を出版。松井富一著「国際的出版都市建設の夢」刊行 教科書「よいこの科学」1年刊行(以後、各種教科書を刊行) アメリカの教科書を翻訳した「基礎科学教育叢書」創刊。 第1回青空コンサート(高木東六、大谷冽子、升田徳一出演)の全国巡回が始まる アメリカの児童図書を翻訳した「社会科おはなしの本」(ピーター・ジャム著)創刊。GHQ/SCAP四国軍政府民間教育部長著「民主主義の技術」刊行 原爆体験記「世紀の閃光」(稲富栄次郎著)刊行	「少女」創刊(～1963年) 広島市立児童図書館(後に広島市子ども図書館)開館 「おもしろブック」創刊(～1959年)
1950(昭和25) 1 3 6 9 10	アメリカの雑誌「TIME」が、松井氏の成功を紹介 和英対訳漫画「おさる三銃士」(倉金章介著)刊行。西宮市で開催の「アメリカ博覧会」に児童図書館を出展 ぎんのすず児童映画協会製作「ばくらのゆめ」がGHQ/SCAP配給で上映開始 「幼児用ぎんのすず」創刊 「ぎんのすず子ども音楽まつり全国大会」開催	
1951(昭和26) 9 11	書店販売用「ぎんのすず」創刊。広島図書からの寄附をもとに、広島県児童図書館(後に広島県立図書館)開館	「少女ブック」創刊(～1963年)
1952(昭和27) 2 4 9	英語版「SILVER BELLS」創刊 「幼稚園ぎんのすず」創刊	サンフランシスコ平和条約発効、プレスコード失効
1953(昭和28) 6	広島図書による最後の「ぎんのすず」刊行	

「ぎんのすず」主な作家たち

児童文学作家

池田宣政
氏原大作
海野十三
絵馬三平
大林 清
岡本良雄
片山昌造
河合三郎
川崎大治
神戸淳吉
楠山正雄
久保 喬
久米元一
久留島武彦
佐伯千秋
酒井朝彦
佐藤さとる
佐藤義美
柴野民三
白木 茂
土家由岐雄
筒井敬介
都留美正夫
徳永寿美子
長崎源之助
那須辰造
奈街三郎
西山敏夫
二反長 半
浜田広介
平塚武二
牧野吉晴
横本楠郎
三木澄子
水上 明
水谷まさる
宮崎博史
宮原無花樹
宮脇紀雄
山主敏子
横山美智子
吉田甲子太郎
吉田絃二郎
渡辺哲夫
ほか

一般文学作家

青柳瑞穂
阿部知二
一ノ瀬幸三
乾 信一郎
井上究一郎
伊馬春部
大木雄二
尾崎一雄
尾崎士郎
神谷 弘
香山 滋
坂西志保
寒川光太郎
城 昌幸
芹沢光治良
壺井 栄
永井 隆
野尻抱影
畑 耕一
春山行夫
火野葦平
広津和郎
福田清人
北条 誠
細田民樹
村岡花子
森田草平
若杉 慧
ほか

詩人

江間草子
大江満雄
大木惇夫
大木 実
勝 承夫
北川冬彦
草野心平
葛原しげる
黒田三郎
西条八十
サトウハチロー
神保光太郎
竹内てるよ
深尾須磨子
水谷まさる
百田宗治
八十島 稔
与田準一
ほか

挿絵画家・漫画家

秋 玲二
天木茂晴
新井五郎
飯塚鈴児
井江春代
生沢 朗
井口文秀
石井達治
石田英助
伊勢良夫
伊藤幾久造
伊藤隆夫
茨木啓一
入江しげる
いわさきちひろ
岩崎良信
岩本 晃
上田三郎
太田二郎
大槻きよし
小川哲男
小幡俊二
鍛冶貫一
勝山ひろし
花野原芳明
川上四郎
河目悌二
川本哲夫
北田卓史
草野有矩
国保広治
久保雅勇
くまがわまさお
倉金章介(良行)
黒崎義介
河野さみ
古賀亜十夫
小坂 茂
小林和郎
小松崎 茂
駒宮録郎
斎藤五百枝
斎藤くにお
斎藤長三
さかみひさこ
沢井一三郎
沢田重隆
清水良雄
鈴木悦郎
鈴木御水
鈴木寿雄
鈴木登良次
鈴木末央子

瀬尾太郎
多賀 正
高井貞二
武井武雄
武田将美
辰巳まさ江
田中 良
中島秋峯
那須良輔
西島武郎
野沢一夫
長谷川町子
長谷川露二
初山 滋
馬場のぼる
浜崎左髪子
林 義雄
原 やすお
平井房人
福井英一
福井芳郎
福井福助
伏石繁男
古沢日出夫
堀 文子
前谷惟光
松田文雄
松野一夫
松本かつぢ
三木ますお
水野二郎
耳野卯三郎
三芳悌吉
向井潤吉
村上松次郎
安 泰
梁川剛一
山川惣治
山中冬児
山根青鬼
山根赤鬼
夢野凡天
横井福次郎
吉岡 一
吉崎正巳
吉沢廉三郎
ほか



「ぎんのすず」を
ご存知ですか？

広島生まれの児童雑誌

児童雑誌「ぎんのすず」のご利用、お問い合わせ



広島市立中央図書館

〒730-0011 広島市中区基町3番1号

TEL 082-222-5542 FAX 082-222-5545



「銀の鈴」創刊号(高学年向け)



「銀鈴」



「新科学」



「プレイメート」



「青空」



「銀の鈴文庫」



広島図書内部

昭和21(1946)年



中島秋幸絵



岩本 児絵

昭和22(1947)年



岩本 児絵



中島秋幸絵

昭和23(1948)年



松田文雄絵



鈴木寿雄絵

昭和24(1949)年



清水良雄絵



河目徳二絵

昭和21(1946)年8月6日、「ぎんのすず」創刊号が発行された。発行の主体は広島県教職員有志によって設立された広島児童文化振興会。科学・美術・音楽・演劇・体育などの面で子どもたちの校外生活の充実をめざす活動を展開し、その活動の一環として子どもたちを対象とした「ぎんのすず」が発行された。創刊号は、低学年向けと高学年向けのそれぞれ1枚ずつの両面刷りタブロイド判であった。

同年10月からは、松井富一氏が社長をつとめる広島印刷株式会社(後には広島図書株式会社)が印刷する本格的な雑誌形態となり、国民学校初等科(小学校)1・2年生向け、3・4年生向け、5・6年生向けの3種類が発行された。当初の執筆者は広島の教師のほか、在住の作家や画家たちが主体であったが、広島児童文化振興会の役割は、数号のうちに「編集、から」指導、へと変わり、昭和22年6月号以降の誌面からはその名も消えた。

「ぎんのすず」は昭和21年という物資の不足していた時代としては上質な用紙が使われ、きれいな色刷りの誌面もふんだんにあった。その充実した内容は広島の子もだけでなく、全国の子どもたちの人気も得て発行部数を増やしていった。さらに雑誌の種類も学年ごとの6種類となり、執筆陣に中央で活躍する著名・新進の作家たちを迎えることで誌面の一層の充実も行い、昭和24(1949)年には発行部数120万部を突破するほどに成長した。

「ぎんのすず」で成功した広島図書株式会社は、このほかにも中学生向けの「銀鈴」、女学生向けの「青空」などの雑誌や「銀の鈴文庫」などの単行本、さらには教科書出版へとつぎつぎと児童向け出版を広げる一方で、児童映画「ぼくらのゆめ」の製作、自動車による移動図書館の運行などさまざまな児童文化の分野にも進出していった。

一時は全国に向けて120万部以上の出版部数を誇った「ぎんのすず」を中心として、広島県教育や日本児童文化の歴史の中で輝き、みごとな音色を響かせた広島図書であるが、その後の社会や時代の変化、経営事情等により、昭和28(1953)年には広島を拠点とする「ぎんのすず」の発行は終りを告げ、東京そして大阪と形を変えながらも「ぎんのすず」の出版は続けられていった。その後も松井富一氏の児童書出版への情熱は消えず、富一氏の死後もその意志は関係者に引き継がれ出版が続けられていたが、「ぎんのすず」は平成7(1995)年にその幕を下ろした。

注:「ぎんのすず」は学年により「ギンノスズ」「銀の鈴」の名称も用いられているが、便宜上「ぎんのすず」で統一した。

■主な参考文献

- 松井富一
「国際的出版都市建設の夢」
昭和24年
- 森本和子
「占領下の翻訳絵本と教育—広島図書について—」(私家版) 平成10年
- 森本和子
「占領下の翻訳絵本と教育—広島図書について—」(「広島市公文書館紀要」22号) 平成11年
- 高井正文
「広島児童文化会館」(「広島市公文書館紀要」11号) 昭和63年
- 「焼け跡に広島発の希望 児童雑誌「ぎんのすず」再発見」
(「中国新聞」平成12年1月3日第2部)
- 「ぎんのすずの遺産」
(「中国新聞」平成12年1月18日~3月15日 全12回)
- 「すずのひびき」第1~5号
ぎんのすず研究会
平成14~21年

■児童雑誌「ぎんのすず」のご利用は

「ぎんのすず」ほか、広島図書の関係資料は、広島市立中央図書館 3階 広島資料室でご覧いただけます。ご利用の際は、お気軽に職員へお申出ください。

広島市立中央図書館
〒730-0011 広島市中区基町3番1号
TEL 082-222-5542
FAX 082-222-5545
<http://www.library.city.hiroshima.jp/>

昭和25(1950)年



吉沢康三郎絵



黒崎義介絵

昭和26(1951)年



岩崎良信絵



沢田重隆絵

昭和27(1952)年



武田哲夫絵



初山 滋絵

昭和28(1953)年



井口文秀絵



林 義雄絵